

名古屋港の魅力の分析と 今後のみなとまちづくりの方向性について

港絢子¹・鎌田一郎²・外山裕司³・太田正規⁴・鈴木覚⁵

- ¹正会員 一般財団法人みなと総合研究財団研究員
(〒105-0001 東京都港区虎ノ門三丁目1番10号, E-mail: minato@wave.or.jp)
- ²正会員 中部地方整備局名古屋港湾事務所所長
(〒455-0045 名古屋市港区築地町2番地, E-mail: kamada-i2je@mlit.go.jp)
- ³非会員 中部地方整備局名古屋港湾事務所企画調整課課長
(〒455-0045 名古屋市港区築地町2番地, E-mail: toyama-y852a@mlit.go.jp)
- ⁴正会員 一般財団法人みなと総合研究財団主任研究員
(〒105-0001 東京都港区虎ノ門三丁目1番10号, E-mail: ota@wave.or.jp)
- ⁵正会員 博士(環境) 一般財団法人みなと総合研究財団研究員
(〒105-0001 東京都港区虎ノ門三丁目1番10号, E-mail: suzuki-s@wave.or.jp)

日本一の物流機能を有する名古屋港には、金城ふ頭やガーデンふ頭、中川運河、ささしまライブなどの賑わい拠点が存在しており、名古屋地域における一大賑わいゾーンとしての役割が期待されている。だが各拠点は個別に展開されており、名古屋港の“港・水辺”としての魅力創出としては一体感に欠け、むしろ殺風景な港湾といった負のイメージがその資源活用の妨げとなってきた。本研究では、伊勢湾・名古屋港の玄関であるガーデンふ頭、中川運河、ささしまライブ等の賑わい空間において、名古屋市民や港への来訪者への意識調査等をもとに名古屋港地域の魅力向上を図る上での現状・課題等について把握・分析することで、今後の具体的な取組について提案したものである。

キーワード:名古屋港, 中川運河, 新みなとまちづくり

1. はじめに

国土交通省港湾局は長期港湾政策「PORT2030」を2018年(平成30年)7月に公表し、その中で「列島のクルーズアイランド化」と「ブランド価値を生む空間形成」を主要な施策の一つとして位置づけたところである。その動きを受け、みなと総合研究財団では、国土技術政策総合研究所の協力のもと「新みなとまちづくり研究会」を立ち上げ、みなとまちづくりの新しい動きについて議論し、2019年(令和元年)5月「新みなとまちづくり宣言」として公表したところである。

さて、日本一の物流機能を有する名古屋港には、“港・水辺”としての魅力、様々な先端産業が立地する工場施設など他地域には見られない独特の空間が形成されている。こうした港の景観に加えて、モノづくり交流拠点として新たな賑わい創出を図る金城ふ頭、古くから伊勢湾・名古屋港の玄関として、クルーズ船等の停泊や日本有数の集客力を誇る水族館等の賑わい拠点のあるガーデンふ頭、都心と港を結ぶ水辺のオアシスとしての機

能が期待される中川運河、新たな都心機能が期待されるささしまライブ等が立地するなど、名古屋港湾エリアは名古屋地域における一大賑わいゾーンとしての役割が期待されているところである。

一方、賑わいづくりに向けては、各拠点ごとに“港・水辺”としての魅力創出・空間形成に向けた街づくり計画やまちづくり協議会等によるエリアマネジメントなどの地域活性化の取組が進められている。

しかしこれらの取組は、個別に展開され魅力創出としては一体感に欠けているのが現状である。また、地域住民や港の来訪者には、殺風景な港湾といった負のイメージを持つ人々もおり、その資源活用の妨げとなってきた。

本研究は、伊勢湾・名古屋港の玄関であるガーデンふ頭、中川運河、ささしまライブ等の賑わい拠点において、名古屋市民や港への来訪者への意識調査等をもとに、名古屋港地域の魅力向上を図る上での現状・課題等について把握・分析することで、今後の具体的な取組について提案したものである。

なお、本研究の対象地域は、図-1に示すように名古屋

屋駅近傍から名古屋港、伊勢湾を結ぶ水域で連結されており、都心と港・海をつなぐ中川運河の役割が重要であると考えられる。

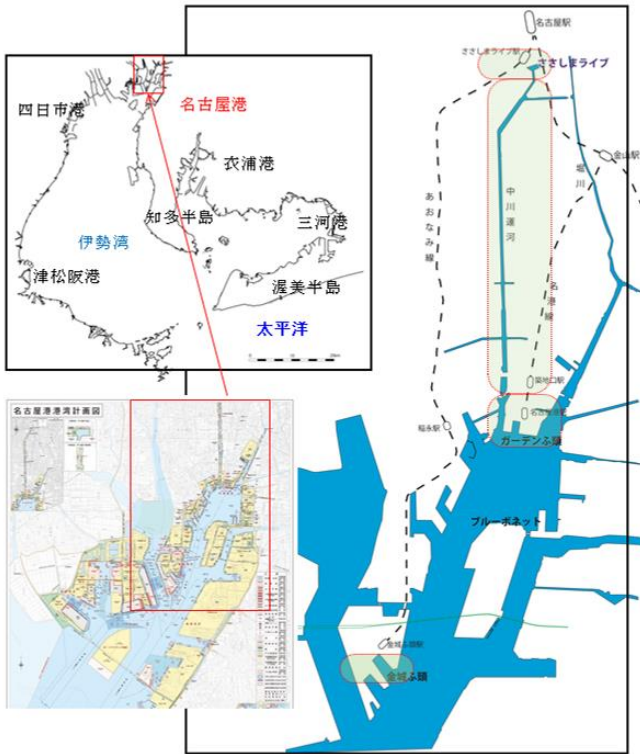


図-1 名古屋港位置図と検討対象エリア

2. 研究方法

最初に、港への来訪者や市内住民へのアンケート調査による意識・要望調査を行い、利用者の視点から分析した。あわせて、各拠点の官民の関係者に対するヒアリングを行い、開発者（運営者）側の認識も把握した。それぞれの結果を踏まえ、名古屋港における魅力のその特性や課題を整理した。

次に、明らかになった課題に対し、具体的な取組として、各拠点での取組と名古屋港全体での一体性を発揮するために拠点間連携による取組についても提案した。

3. アンケート・ヒアリング調査による意識・要望調査

(1) アンケート・ヒアリング調査の目的・方法

アンケート・ヒアリング調査の内容は表-1 に示すとおりである。アンケート調査は名古屋港地域への来訪者（以下、来訪者アンケートと記す）へ直接行うとともに、名古屋市の住民に対してインターネットを通じた調査

（以下、住民アンケートと記す）を行うこととした。設問内容は名古屋港の印象や魅力向上に必要な事項である。

ヒアリング調査は、街づくりにかかわる行政担当者、港湾管理者、水上バス等を運航する民間事業者等を対象とした。聞き取りの内容は取組の現状や今後の計画、取組等を通じて感じている問題点や課題等である。

(2) アンケート調査結果の分析

アンケート調査結果について、調査方法種別、回答者居住地別、名古屋港来訪頻度別に整理した。特徴的な傾向を以下に述べる。

a) 名古屋港の印象について

図-2 に訪問頻度の違いによる名古屋港の印象の違いを示す。

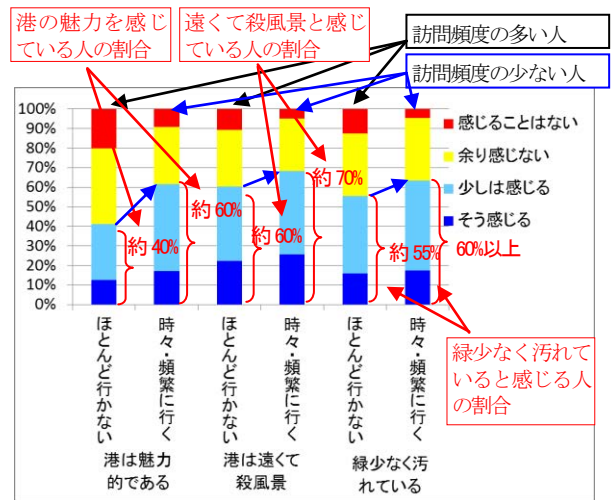


図-2 港の印象（住民アンケート）

「港は魅力的である」という質問にそう感じる、少しは感じるという回答者は、ほとんど行かない人で40%程度、時々行く・頻繁に行く人で60%程度いる。一方で、殺風景とか汚れているといったイメージは、港に行く頻度の高い人は60%～70%近い回答者が少しは感じる、そう感じると回答している。頻度の低い人は約55%～60%の回答であり、時々行くまたは頻繁に行く人が負のイメージをより高い割合で持っている。

以上のように、名古屋港への訪問頻度が多い人は少ない人に比べて、港の機能的な空間（物流施設や工場など）や海の開放的な空間を魅力的と回答する割合が高い。

このことは、港に行き直接港にふれることで、その魅力を認識することができること、あるいは逆に港の魅力を理解している人は港を訪れる頻度が向上することを意味しているものと考えられる。その一方で、港には緑が少なく、殺風景で汚れたといったイメージもあることが考えられる。

表-1 利用者アンケート及び関係者ヒアリング

アンケート調査			
種別	対象地区	回答者数	質問内容
来訪者アンケート	ガーデンふ頭, 中川運河, ささしまライブ, 金城ふ頭	327名	①プロフィール(性別, 年齢, 居住地) ②訪問頻度, 使用交通機関, 水上バス利用経験 ③名古屋港のイメージ(印象)に関する質問 ④賑わい創出に向けた取組についての質問(要望)
住民アンケート	港区, 中川区, 西区, 千種区, 緑区	500名	同上
ヒアリング調査			
ヒアリング先	内容		
名古屋港地域の賑わい拠点の管理や運営に係る行政, 民間事業者等	<ul style="list-style-type: none"> ・賑わい拠点の現状と課題, 取組, 今後の計画 ・拠点, 施設間の連携の現状と計画 ・水辺・海辺空間を活かすために必要な方策 		

また, 住民の居住地別の回答結果を図-3に示す。港の近くの居住者の方が, 離れた地域の居住者よりも, 港湾空間や景色が魅力的と思う割合は低い。これは, 港の印象が緑が少なく殺風景といった印象があることの反映とも考えられる。

以上から, 港の印象については以下のような結果を得た。

- ・港の魅力は頻繁に行く人がより多く感じるようになる。
- ・一方, 港は緑少なく殺風景といった負のイメージも, 頻繁に行く人がより多く感じるようになる。
- ・港の近くに暮らす人々よりも, より離れたところに暮らす人々が「港は魅力的である」と考えている割合が若干高い。

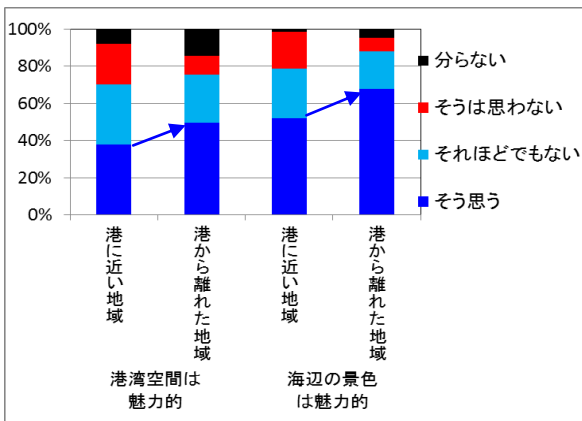


図-3 港の印象 (来訪者アンケート: 地区別集計)

b) 賑わい創出に必要な取組について

賑わい創出に必要な取組に関し, アンケート事項のうち主な項目について以下に示す。

①情報発信

来訪者アンケート(図-4)では80%を超える回答者が必要と回答している。住民アンケート(図-5)結果では, 若干は必要であるを加えた回答率は90%近いが, 必要

であるまでを含めた回答率は70%に届かない。

②親水性の向上

親水性の向上については, 来訪者アンケート(図-4)では親水性向上は80%程度, 住民アンケート(図-5)では若干は必要であるまでを含めると90%を超える回答率となる。

③環境の改善

環境改善は来訪者アンケート(図-4)では70%以上が必要と思うと回答し, 住民アンケート(図-5)では若干は必要という回答までを含むと90%を超える回答率となる。

④アクセスの改善

アクセスの改善については, 来訪者アンケート(図-4)では比較的少なかったものの, 住民アンケート(図-5)では若干は必要という回答まで含めると90%程度であった。また, 水上交通については, 図-6に示すように利用率は16%程度とまだ低い。

なお, 来訪者アンケートにおける記述回答では利用料金の検討, 水面からの眺望の改善などの工夫が必要とのコメントが寄せられた。

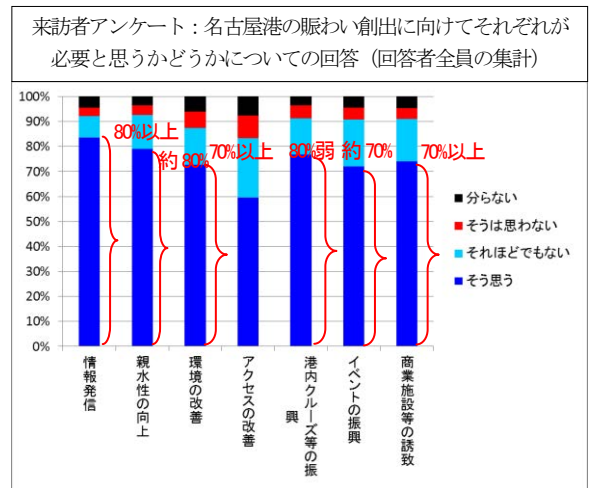


図-4 賑わい創出に必要なこと (来訪者アンケート)

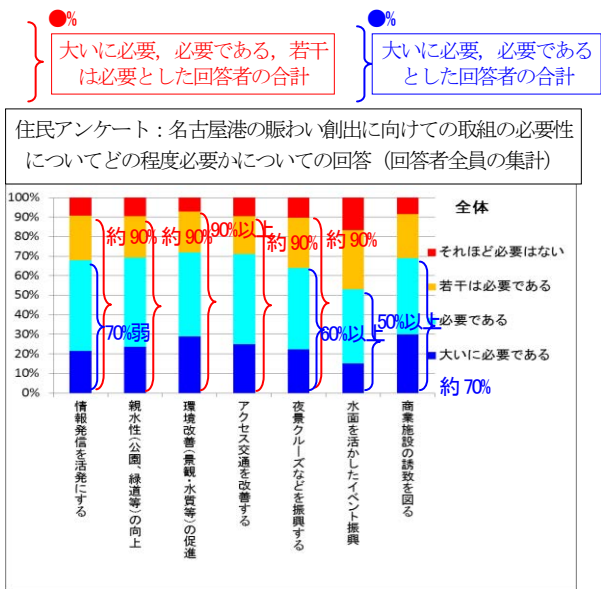


図-5 賑わい創出に必要なこと（住民アンケート）

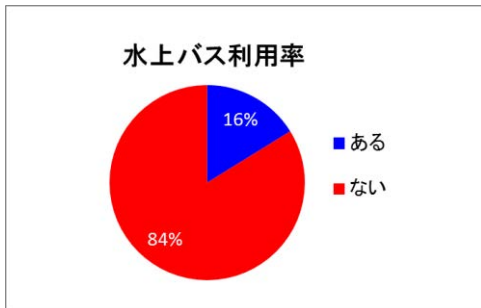


図-6 水上バス利用率（来訪者アンケート）

⑤ 港内クルーズ等の振興（水上交通の振興）

港内クルーズの振興については来訪者アンケート（図-4）では、80%近くが必要と回答、親水性の向上に次いで高い回答率である。一方、住民アンケート（図-5）では若干は必要までを含むと90%程度の回答率になるが、必要とする回答までだと60%を若干超える程度である。

⑥ イベントの振興

イベントの振興は、来訪者アンケート（図-4）では70%を若干超える程度であるが、住民アンケート（図-5）では必要であるとする回答率は50%を若干超える程度であり、他の取組と比べて低い。

⑦ 商業施設等の誘致

商業施設等の誘致についても必要という回答は比較的高い割合を占めた。来訪者アンケート（図-4）では、必要とする回答率は70%以上であり、住民アンケート（図-5）では必要または大いに必要とした回答率も70%程度で、他の取組と同程度であった。

(3) ヒアリング結果

ヒアリング結果として、以下に、問題点や課題につながると考えられる聞き取り事項を示す。

a) 街づくりにかかわる行政担当者

- ・ささしまライブには商業施設も多くあり、集客を期待している。
- ・ささしまライブは心理的な距離があるので、「ささしまウェルカムバス（名古屋駅からささしまライブまでを直通でつなぐバス）」の社会実験を行っている。
- ・中川運河の活用では水質浄化が重要と考えている。
- ・「クルーズ名古屋（ささしまライブ～ガーデンふ頭までの中川運河を運航する水上バス）」は乗船場が分りにくい。
- ・人が楽しめる沿川の整備が求められるが、港湾制度に縛られているところもある。
- ・金城ふ頭の賑わい施設では、（集客に）苦戦しているところもある。

b) 港湾管理者

- ・賑わいづくりは民間事業者とどのように組めるのか、事業者がメリットを感じ、関心を持たせることが課題と感じている。
- ・クルーズ名古屋の運航は社会実験として取り組んでいるが、今のところ採算ベースではない。
- ・中川運河では、沿岸は市道までの空間に限定されており、背後のまちづくりと連携しないと広がっていない。周辺との連携が課題である。

c) 水上バス運行事業者

- ・水上バスを単なる交通手段とすると、費用面などで地下鉄にかなわない。乗船が楽しめる体験になるようにしたいが、沿川に見世物が少ないのが現状（良好な景観スポットを増やす努力）。
- ・クルーズ名古屋の社会実験は期間が短く、知名度が低い。
- ・乗船場は賑わいのあるところ（来訪者の目につきやすいところ）に設置したい。

4. 課題の整理

上記のアンケート・ヒアリング結果から以下の5つの課題を整理した。

① 情報発信

アンケート結果から港の魅力は、来訪頻度が高い人がより感じており、港に来ていただくこと、そのためには港のことや港で行われていることをより知ってもらうための情報発信が重要であると考え。また、ヒアリング結果ではクルーズ名古屋など知名度が低いといった意見もあり、知名度を高めていく努力が求められる。

なお、イベント等の振興についてはイベントそのものによる賑わい創出の他、情報発信機能を並行して持つと考え、ここでは情報発信課題に含まれるとする。

②環境改善

親水性の向上については、アンケート結果からは比較的高い要望事項が寄せられている。また、住民アンケートでは、港に頻繁に訪れる人々が名古屋港の印象として、緑少なく汚れているという印象をより多く抱いていることから、今後も環境改善が必要になると考える。

また、ヒアリング結果からは、水質浄化や人が楽しめる沿川の整備が求められるとしており、「環境改善を図ること」を課題として整理した。なお、親水性の向上もこれらの結果から課題の一つとして挙げることが考えられるが、ここでは人が親しめる環境づくりとして、環境改善の課題に集約するものとした。

③アクセスの改善

アクセスの改善は来訪者アンケートでは要望として高いものではなかったが、住民アンケートでは他と同程度の割合で要望が挙げられている。来訪者アンケートの対象者はすでに、港へアクセスしている人を対象としているので、現状でのアクセス方法をよく知っていて、改善してほしいというニーズの回答としては低くなった可能性がある。また、ヒアリング結果からは、賑わい拠点までの心理的距離があり、それを補う水上交通などの社会実験が行われたり、水上交通では乗船場が分りにくいといったアクセス改善の要望が挙げられている。これらのことから、アクセス改善を今後の取組課題として整理した。

なお、水上交通の振興についてはアクセス改善の一環として課題に含まれる課題として整理するものとした。

④賑わい施設等の誘致

アンケートの結果では、商業施設等の誘致については他の取組と概ね同程度で必要との回答を得ている。ヒアリング結果では、商業施設等が立地する賑わい拠点で集客の期待があること、水上バス等の振興に向けても賑わいのあるところに乗船場を設置する、景観スポットを増やすなどのニーズがあることから、賑わい施設等の誘致を課題として整理した。

なお、商業施設誘致ではなく、賑わい施設としたのは、商業目的以外の集客や賑わいづくりに有効と考えられる施設（例えば公園・シンボリックな施設など）も賑わい施設と考えられるためである。

⑤連携の枠組みづくり

連携については、ヒアリングの結果から背後のまちづくりとの連携、様々な事業者のニーズを踏まえた連携などの必要性に関するコメントが寄せられている。

また、名古屋港エリアが名古屋地域における一大賑わいゾーンとして発展していくためには、それぞれが共有する魅力（名古屋における港・水辺としての魅力）をそれぞれの拠点の枠組みを超えて連携して活かしていくことが求められていると考える。このようなことから、今

後賑わいづくりに取り組んでいくための課題として、連携の枠組みづくりを挙げるものとした。

5. 賑わいづくりに向けた対応方策の検討

4. で示した課題から導かれる対応方針を、各拠点が行うべき取組と連携して行うべき取組とに分けて以下に抽出した。これらの全体イメージを図-7に示す。

(1) 情報発信

港には本来「みなと」らしい魅力があり、その魅力を活かした取組を進めるとともに、以下の取組が必要であると考えられる。

a) 各拠点・賑わい施設の情報発信

各拠点の魅力や賑わい施設の情報発信はこれまでも活発に行われてきている。これらの取組においても、各拠点間の交流により、情報の共有や連携による情報発信を検討していくことが考えられる。

①各拠点の取組

- ・各拠点、施設によるこれまでの情報発信活動

②拠点間連携による取組

- ・拠点間交流等による情報発信活動

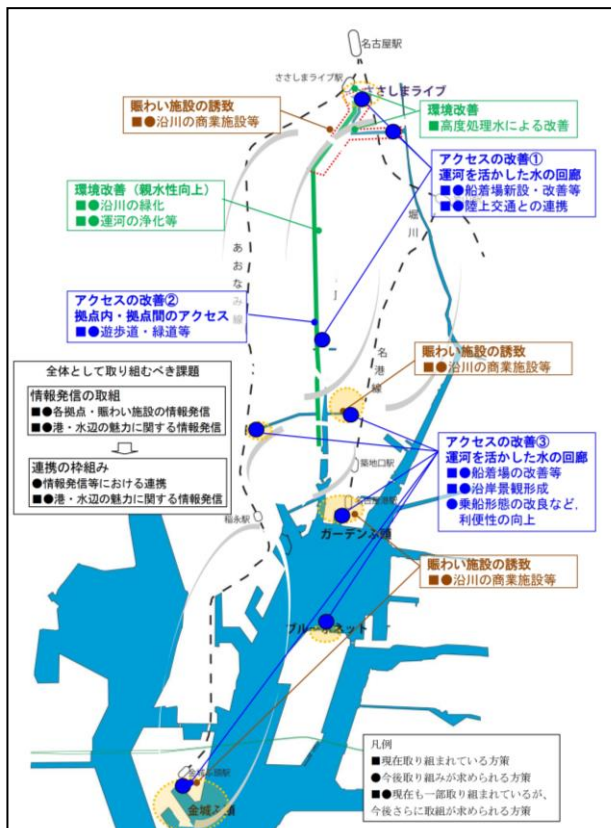


図-7 名古屋港の賑わいづくりのイメージ

b) 港・水辺の魅力に関する情報発信

港湾地域の魅力アップは、それぞれの拠点が、取組情報を共有しつつも独自に行っていく必要がある。

①各拠点の取組

- ・現状の取組や計画の推進

ただし、名古屋港の“みなとらしさ”については今後拠点間でイメージを共有していく必要がある。

- ・新たな緑地・遊歩道整備、ライトアップ等

賑わい拠点周辺においては、これまで以上に修景努力、港を魅せる努力が必要であるとする。

②拠点間の連携の取組

- ・情報の共有・一体性の創出

各拠点の取組情報を共有し、一体感のある（ストーリー性のある）魅力づくりが求められている。

(2) 環境改善

環境改善の取組は基本的に各拠点の取組であるとする。ただし、連携しての取組内容としては、それらの情報共有がある。

①各拠点の取組

- ・現状の取組や計画の推進

現状でも水質改善の取組、計画が進行しており、露橋水処理センターによる高度処理水はささしまライブに放流し、泊地の水質改善に活用している。

- ・緑化・清掃活動等の環境改善の取組

現状でもキャナルアートなどが地域活動として植栽や清掃活動に取り組んでいる。こうした地域連携の取組を今後も推進していく。

- ・中川運河水質改善等の取組

中川運河における既存の取組に加えて、地域の住民参加や環境学習の場としても活用するなど、新たな水質改善等の取組の展開が求められる。

②拠点間連携による取組

情報の共有に取り組んでいく。水質改善や緑化・清掃活動等の情報を共有することで、取組の工夫や協調など取組気運の向上などにつながる事が考えられる

(3) アクセスの改善

アクセスの改善には、各拠点内の回遊性の改善、拠点へのアクセスの改善がある。方策としては、水上交通などの地域の特性を生かした交通手段の活用や、港湾域のため、物流交通との調整にも配慮していく必要がある。これらの取組には拠点で取り組むべき事項と、連携による取組が考えられる。

①各拠点の取組

- ・各拠点内の回遊性の向上、アクセスの改善

例えばささしまライブから松重閘門、堀川につなぐ回遊性の確保のための遊歩道整備などが考えられる。

- ・交通機関等における連携

地下鉄、あおなみ線、水上交通、バスなど多様な交通手段の連携によるアクセスの改善を検討する。

②拠点間連携による取組

- ・水上交通の魅力向上

社会実験における「クルーズ名古屋」は収益性が厳しく、単なる交通手段としては、成立が困難であり、乗船そのものを楽しめるものにしていく必要がある。例えば以下のような手法が考えられる。

- ・各拠点が連携し、水上からの景観形成に努める。
- ・自転車を乗せるなど利便性を高める検討
- ・ダックツアー（水陸両用バス）の導入

(4) 賑わい施設等の誘致

地域における新たな事業（店舗等）創出や外部からの商業施設誘致は、各拠点が積極的に取り組んでいるところであり、中川運河沿川のみならずアクルスでは、キッザニアの誘致が決定し、金城ふ頭ではレゴランドが拡張し、「レゴニンジャゴー・ワールド」を2019年7月にオープンした。そのほかささしまライブの泊地東側市有地やガーデンふ頭でも企業立地のサウンディングが行われている。

これらに加えて環境改善課題で示した緑化活動、地域住民を巻き込んだ取組が可能な場を創出していくことも重要と考える。

①各拠点の取組

- ・各地域における新たな店舗・事業等の創出
- ・各拠点ごとの商業施設誘致等の取組
- ・緑地、公園、緑道等の賑わいの場づくり

②拠点間連携による取組

拠点間の情報共有等による競合の抑制を図っていく。商業施設の立地は競合も生じる可能性もあることから、拠点間の情報共有が重要になると考える。

(5) 連携の枠組みづくり

これまでに示した各種の取組には拠点が連携して実施すべきものが少なからずある。こうした連携の取組を円滑に行っていくため連携の枠組み作りが必要となる。

①情報発信拠点整備、情報発信母体

「港の魅力」を情報発信するためには、その広域性や多様性から、拠点ごとに行っていくよりも連携した取組が有効性、効率性に優れると考える。このような情報発信を継続して実施するためには、発信拠点や発信母体となる枠組みや組織が必要になる。

以上、現状からの課題とその対応策をふまえた今後の取組方針を図-8に示す。今後は、社会実験的な取組を実施しつつ、連携の枠組み作りなどについても検討し、よりよい取組案を策定したいと考えている。

課題 <ul style="list-style-type: none"> ■ 情報発信 ■ アクセスの改善 ■ 環境改善 ■ 賑わい施設等の誘致 	今後の取組方針 <ul style="list-style-type: none"> ■ 魅力づくりと拠点間連携による情報発信 ■ 水上交通の魅力向上・陸上交通との連携等 ■ 中川運河水質改善、沿川緑化等の環境改善 ■ 中川運河沿川商業施設、拠点賑わい施設等
---	---



今後の方針
 今後は連携による取組の強化を図っていくことをめざし、当面は、社会実験的な取組を行いつつ、情報発信等の機能を有する枠組み・組織を検討していくものとする。

①社会実験的取組
 連携イベントや水上交通の魅力向上等の課題に対して、各拠点が連携して社会実験に取組み、その効果や運営採算性等を検討・評価していく。

②情報発信の枠組み・組織の検討
 海辺・港の魅力（資源）の活用や、その魅力を発信するための枠組み・組織を検討していく。

図-8 今後の取組方針